

「国際化」を目指すための必修科目の意義

—新入生英語アンケート調査による英語教育学的考察—

Significance of Compulsory Subjects for "Internationalization":
English Education Consideration to a Survey on Fresher's English Proficiency

大山 健一*

Abstract

This paper proposes how English compulsory subjects are necessary in terms of internationalization. According to the study of education improvement in Japan, to acquire English basic skills is significant at a university. The remedial aspects, however, tend to contain only to get a credit of each class. This is mostly because teachers carry out English classes from asymmetrical global viewpoints of social demands. This can lead to affective filters for students' learning. For their demands, teachers should know what students are willing to learn at a university level. Their intellectual willingness can be a sort of references to curriculum development for both methods in teaching English and teacher training.

キーワード：教育改善研究, カリキュラム開発, ニーズ分析, リメディアル教育, 英語教育学

Keywords : Study of Education Improvement, Curriculum Development, Needs Analysis, Remedial Education, English Education

1. 目的

本論文では、新入生英語アンケート調査を基に、必修科目としての英語の意義を提唱することが目的である。「国際化」(Internationalization)を目指すにあたって、高等教育における大学英語の基礎にこそ、現代社会に必要な英語を身に付ける基幹が存在していると言っても過言ではない。しかしながら、学習初期段階でかつ必修科目においては、ただ単に国際情勢や社会的需要のみに頼った知識を学ぶだけでは「単位を取得するための授業」になりやすく、「学生のためになる授業」とは懸

け離れてしまう。特に言語学習においては、このような「情意フィルター」(Affective Filters)を避けないと、自発的な学習には結び付かない。よって、学生の知的好奇心が何であるかを知る必要性があり、学生が大学で何を学びたいのかを意識しつつ、授業展開をすることが責務であると考えられることを提唱する。

2. アンケート調査

新入生英語アンケート調査は、2018年度の情報文化学科1年生全員93名のうち84名(留学生7名、調査不可能者2名を除く)に実施をした。江戸川大学の教育理念として、「国際化」と「情報化」が建てられ、前者を担うべく、この年度よ

2018年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科助教 言語学, 外国語教育

り情報文化学科では英語を「英語演習Ⅰ」（前期科目）と「英語演習Ⅱ」（後期科目）の1年次必修科目として定めた経緯が存在している。3つのポリシー（アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー）の支えとなっていることは当然ではあるが、この1年次必修科目として英語を定めた際には、大学英語の基礎を身に付けられる授業環境が必要である。しかしながら、2年次以降の卒業まで、また卒業後を意識した場合、年次毎の繋がりに注意しなくてはならない。授業内容を精密にするためにも、その支えとして学生が江戸川大学の英語の授業で何を学びたいのかを把握した上で、授業準備・展開をするのが現実的であると考えられる。

入学時のガイダンスの際に実施される英検IBAによる英語力診断からある程度の英語力を把握することは可能である。しかしながら、外的要因による未受験者を含めた場合に、学科全員の英語力を捉えることは不可能であるため、アンケート調査は必要不可欠である。

以上を基に、調査項目は、①「既に取得している英検の級、TOEICとTOEFLのスコア」、②「海外滞在歴」、③「在学中に取得したい英検の級、TOEICとTOEFLのスコア」、④「在学中の海外渡航希望」、⑤「14項目の大学で学びたい内容」、から構成された。実施時期は、「英語演習Ⅰ」の初回授業時に調査を行った。当日の欠席者には別日に個別調査として実施した。

3. 調査分析

まず、①「既に取得している英検の級、TOEICとTOEFLのスコア」に関しては、表3-1となった。

英検では、級の取得者がのべ34名であった。全体の84名からすると、半分以上の50名ほどが英検受験未経験者であることが分かる。TOEICは1名のみ（スコアは300点台）、TOEFLは0名であった。

次に、②「海外滞在歴」に関しては、修学旅行や家族旅行のみで、留学などの滞在歴はなかった。よって、滞在歴は1週間程度で、「言語習得論」（Language Acquisition）などで基準となる半年以上の海外滞在経験者は誰もいなかったことになる。

③「在学中に取得したい英検の級、TOEICとTOEFLのスコア」に関しては、表3-2と表3-3となった。

英検では、準2級が84名中42名と一番多かった。情報文化学科における全学生の取得目標を準2級と明言しているため、その表れであると考えられる。続いて、2級と3級であった。

TOEICは、84名中59名がスコア取得を希望しており、500点台から600点台までが一番多かった。これも英検と同様、情報文化学科における全学生の取得目標を500点台と明言しているため、その表れであると考えられる。しかしながら、

表 3-1 取得済み英語資格一覧 (N=84)

	英検							TOEIC	TOEFL
	1級	準1級	2級	準2級	3級	4級	5級		
人数	0	0	1	6	14	8	5	1	0

表 3-2 取得希望英語資格一覧 (N=84)

	英検							TOEIC	TOEFL
	1級	準1級	2級	準2級	3級	4級	5級		
人数	5	3	33	42	22	4	4	59	18

表 3-3 取得希望 TOEIC スコア台別一覧 (N=59)

	TOEIC									
	900	800	700	600	500	400	300	200	100	未定
人数	3	1	2	15	15	5	1	3	1	13

未定が13名もいたことから、TOEICという資格試験の名前を知っていたとしても、どのような資格試験であるのかを知らない学生がいたことが事実として挙げられそうである。

TOEFLは、84名中18名に留まっていた。この理由としては、留学を希望する学生が少ないということと、TOEFL自体の認知度が低いことが関係しているように感じられる。

④「在学中の海外渡航希望」に関しては、84名中54名が在学中に海外へ行きたいとしている。しかしながら、大半が数週間の旅行形態を希望しており、半年以上を希望しているのは1名のみであった。上述したTOEFLスコア取得希望者が84名中18名であったことから裏付けられているようである。

最後に、⑤「14項目の大学で学びたい内容」に関しては、表3-4となった。

一番多かったのは「就職活動力」で84名中54名であった。続いて「英会話力」「語彙力」「聴力」「英文法」「発音」「資格対策」が40名を超えてい

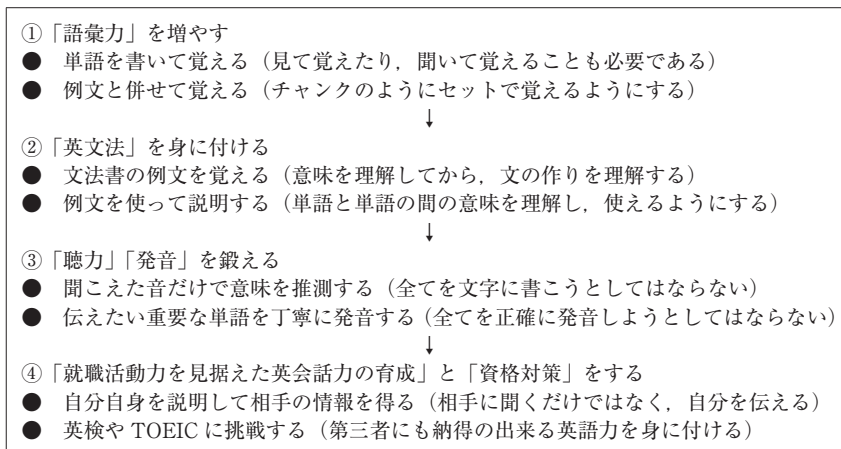
た。この7点を踏まえると、「語彙力を増やし、英文法を身に付け、その上で、聴力と発音を鍛えた後、就職活動力を見据えた英会話力の育成と資格対策をする」ことが学生ニーズに応えることに繋がると考えられる。尚、その他を選択した2名においては、「なし」「オンラインゲームで外国人と話せる力」であった。

以上を踏まえ、英語教育学的な自然性(Naturalness)の視点から、Implicational Hierarchy (IH) (Jakobson 1941) と「有標性」(Markedness) (Eckman 1977) を基にするのが妥当である。前者は容易なものから困難なものへと習得する学習プロセスであり、後者は言語普遍的特徴を示す「無標」(Unmarkedness) から言語固有的特徴を示す「有標」へと習得する学習プロセスである。加えて、Feature Hypothesis (FH) (McAllister et al. 2002) で示されている言語習得の内容に関わる素性も存在している。これらを基にした情報文化科学科学生への指導プロセスと試案は表3-5の手順と考えられる。

表 3-4 学習希望内容一覧 (N=84) (複数選択可)

	人数		人数
英会話力	52	プレゼンテーション力	23
英文読解力	26	英文法	43
聴力	45	語彙力	47
留学の英語力	13	発音	43
レターを書く力	23	資格対策	41
レポートを書く力	19	就職活動力	54
ディスカッション力	16	その他	2

表 3-5 情報文化科学科学生への指導プロセスと試案



情報文化学科の1年次必修科目としては、この4段階のうち、上級クラス、中級クラス、初級クラスごとにそれぞれが③または④までのプロセスを、②または③までのプロセスを、①または②までのプロセスを実施することが、学生ニーズに合致した授業内容となり得る。重要視しなくてはならない点は、どのクラスにおいても①を通過する必要があるということである。換言すれば、②でも③でも④でも、①に関連したプロセスにすることが肝要であると考えられる。総合的な学習効果を得るためにも、英検を活用し、学生の英語学習への動機付けをするのが良いと思われる。

特に、2018年度から英検の学内実施が年2回となり、第1回目の6月と第2回目の10月の複数回受験が可能となった。2017年度と比較すると、図3-1となった。

2017年度と比較すると、2018年度は受験者数が明確に増加している。2017年度までの第2回のみ実施ではなく、第1回目を実施することで、学生の受験機会を多くすることに繋がる。このことにより、長期的にも、短期的にも、受験への目

標設定が容易となり、受験者数の増加に至ったと考えられる。

加えて、情報文化学科と他学科（人間心理学科、現代社会学科、経営社会学科、マス・コミュニケーション学科、こどもコミュニケーション学科の計5学科）との英検受験者数を比較すると、図3-2となった。

他学科と比較すると、情報文化学科では資格取得への意識が高い学生が多くいることが垣間見られる。上記のアンケート結果の裏付けとして、1年生の受験意識は高い。3年生は就職活動などから資格の必要性を感じている結果、受験意識が高いと推測できる。しかしながら、2年生では受験意識が低いという問題点があり、進級後の3年生に向けた今後の対策は急務であると考えられる。

以上から英検3級の受験から英語学習の出発点と考えると、1年生の受験者は多く、上述した指導プロセスと試案の基礎的な教材の一つには英検3級が良いと思われる。学生の学習動機に合致していることから、「情意フィルター」を抑えたことにも繋がり、学習への弊害も少ないと考えられる。

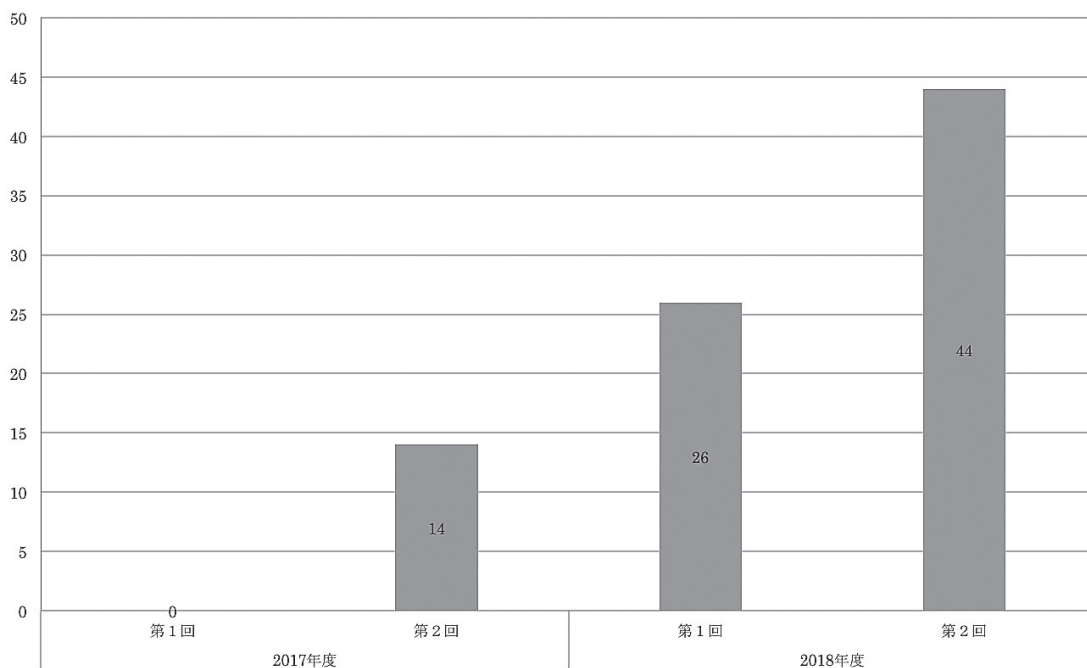


図3-1 全学の学内英検受験者人数

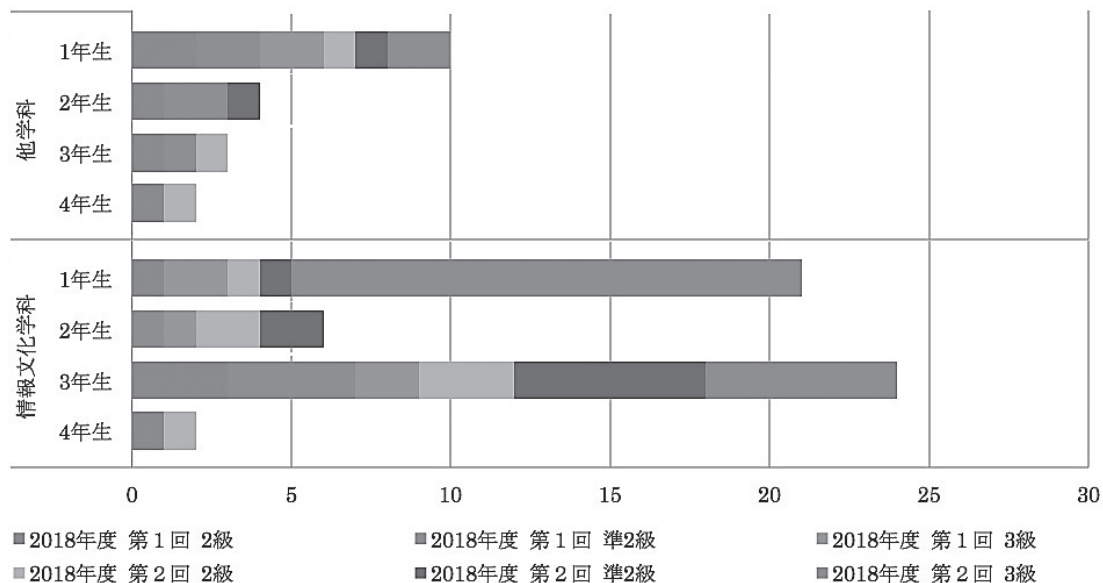


図 3-2 学科・年次別の学内英検受験者推移

4. 結論

新入生英語アンケート調査を基に、IHや「有標性」、またFHから上記の指導プロセスと試案を提示し、必修科目としての英語の意義を論じてきた。2018年度より情報文化学部は新カリキュラムを導入し、英語の科目を前期・後期の1年間1年次必修科目として位置付けた。将来を担う学生のためにも、「語彙力を増やし、英文法を身に付け、その上で、聴力と発音を鍛えた後、就職活動力を見据えた英会話力の育成と資格対策をする」ためには、やはり英検の3級から2級までの問題を基礎とし、TOEICの問題をその応用として使いつつ、授業展開をすることが肝要であると考えられるのではないだろうか。その理由として挙げられるのは、英検は一般的な英語力を図る資格試験であるためであり、TOEICはビジネスにおける英語力を図る資格試験であるためである。よって、前者から後者へと移行する学習プロセスが自然的であろう。江戸川大学が「国際化」を目指すためには、城一他(2018)の「教養科目としての英語」と、大山(2018)の「教職科目と

しての英語」と、本研究の「学科科目としての英語」の共存が必要である。これら3つの英語の特徴を活かすことが大切であり、本研究の結果が今後の英語教育学への寄与に貢献できると考えられる。

参考文献

- Eckman, F. R. (1977). Markedness and the contrastive analysis hypothesis. *Language Learning*, 27, 2, 315-330.
- Jakobson, R. (1941). *Child Language Aphasia and Phonological Universals*. The Hague: Mouton.
- 城一道子・鈴木哲平・大山健一. (2018). インプットからアウトプットへ.『江戸川大学紀要』, 28, 73-84.
- McAllister, R., Flege, J. E. and Piske, T. (2002). The influence of L1 on the acquisition of Swedish quantity by native speakers of Spanish, English and Estonian. *Journal of Phonetics*, 30, 229-258.
- 大山健一. (2018). 英語科教育法における英語学の意義.『江戸川大学紀要』, 28, 45-49.

